



カブトガニ繁殖地が広く見渡すことができる展望室からの景色はまた格別なんだそう。博物館横の砂浜では放流や観察会などが行われています。



笠岡市は2003年にカブトガニ保護条例というのを策定し、7月をカブトガニ保護啓発月間に決めています。この時期には放流だけでなく海岸のクリーン作戦も行っていて、毎年約1,000人もの方が参加して笠岡の海岸をきれいにしてくれています。

カブトガニや海の環境を守ることの大切さを次の世代に知ってもらい取り組みも行っています。博物館の横には、私たちが「プライベートビーチ」と呼んでいるちっちゃな砂浜があって、そこでは「海辺の学校」という生き物観察会を開いています。笠岡市の主に海側にある五つの中学校で結成された「カブトガニ保護少年団」も、毎年夏休みに研修会を開いて幼生の放流や干潟の生き物の観察などを行っています。博物館の仕事を体験してもらう「学芸員チャレンジ」も人気で、小中学生はシェルランプ作りや魚の骨格標本を作り、高校生はもう少し本格的に干潟でカブトガニの調査をしたり、採石場跡地で化石掘りをしたりします。幼生調査では、干潟を四つん這いになって進んでいき、股まで泥に埋まりながら幼生や脱皮した殻を見つけていくんです。私なんか恐ろしくて行けないけれど、高校生は元気いっぱいに取り組んでいますよ。地域を盛り上げるためにグッズもたくさん作っていて、特に人気なのはカブトガニのTシャツです。カブトガニの成体をそのままプリントしたTシャツを学芸員が自分で作って着ていて、「それいいね」ということで商品化しました。下手にスタイリッシュに図案化するより、マニアックなほうが刺さるんでしょうね。

飼育と放流を続け、当たり前前の存在に戻したい

子どもの頃から海の生き物が好きで、商売をしていた母親について行って、寄島の魚市場で競りにかけられる魚介類を眺めるのが楽しみでした。おじさんに「邪魔だ!」と怒られ、怖いなーと思いながらもずっと見ているんですが、待てども待てどもシャコばかりで、サメとかもっと面白い魚が出て来んかって思っていました。今ではシャコも取れなくなってし

まいましたけど。最近健康のためにこの辺りの海岸線をよく歩くようになりました。夕方、寄島の青佐鼻海岸に車を止めて、笠岡市の南東端にある正頭地区に向かって西へ歩きます。特にマジックアワーの景色はめちゃくちゃきれいで、日が沈んだ直後に西の空全体がピンク色に染まった写真をスマホにたくさん撮りためています。満月の明かりが海に映り、光の線を描く光景もいいですね。生活や仕事、研究ですずと付き合ってきた海。年を取ったせいかもしれません。「こんなにきれいだったんか」ってしみじみ感じますね。カブトガニの詳しい生息数はよく分かっていません。個体管理ができないので、カブトガニ自体が天然記念物にはなれず、繁殖地が指定されているんです。毎年捕獲される数を見ると、少しずつは増えているとは思んですが、じゃあ人工飼育と放流を止めていいかということそんなことはなく、まだまだ続けなければいけないと考えています。昔の数にまでカブトガニを繁殖させるのは現実的に無理な話ですが、海に行けば当たり前に見られるくらいには復活させたいと考えています。環境保護についてだけでなく、干拓事業という“黒歴史”も子どもたちにしっかり知ってもらい、いつの日か「海に行ったらカブトガニが見られるよ」と言える日が来ると信じています。



カブトガニ博物館で働く人

気軽に行くことができ、人間の文化が根付いている瀬戸内海

子どもの頃から生き物全般が好きで、動物園や水族館、昆虫館によく連れて行ってもらったこともあり、福山大学生命工学部のアクアリウム研究コースに進学しました。広島県の因島にある大学の水族館で水族館の運営や生物の飼育について学び、遠足に来たちびっ子たちの相手なんかをしているうちに、水辺の生き物について教育・普及する仕事をしたいと思うようになりました。博物館に就職してからはX(旧Twitter)を使った情報発信を提案し、他の学芸員たちとカブトガニの生態に関するポストを定期的に行っています。尻尾を丸めているカブトガニの背中を押すと体がピンとまっすぐになる動画など、投稿がバズることもあり、お客さんから反応があるというのはやはりうれしいですね。

ビーチコーミングでよく寄島の三郎島に行くのですが、波も穏やかで景色もきれいで静かなのがいいですね。浜辺に這いつくばって小さな貝殻を探していると、時間がたつのを忘れてしまいます。荒れることが少なく、海に気軽に行くことができるのが瀬戸内海のいいところだと思っていて、海水浴を楽しむ人も多く、漁業も盛んで魚もおいしいし、「人間の文化が海に根付いているよなあ」と実感します。人間の生活と、海の生き物がより共存できるような環境になってほしい。「自然を守るとは、人間の生活を守ることにもつながってくるんだよ」ということをたくさんの子どもたちに伝えていきたいですね。



カブトガニ博物館 学芸員
二宮 颯人さん



学芸員ならではの視点でカブトガニの生態や珍しい姿などをSNSで積極的に発信してカブトガニファンを増やしています(写真左)。飼育室では小さくてかわいらしい1齢幼生から10齢幼生までが愛情をたっぷり注がれて飼育されています。

笠岡市立カブトガニ博物館



カブトガニの繁殖地として天然記念物に指定されている神島水道のすぐそばにあります。カブトガニをテーマにした博物館は世界でもここだけで、生きているカブトガニを展示しているほか、映像や模型を通じて生態について詳しく知ることができます。個体の飼育や放流など、カブトガニの保護に関する取り組みや研究も盛ん。すぐ隣には、ティラノサウルスやブラコンなど7種類8体の実物模型を展示した「恐竜公園」があり、家族連れの憩いの場となっています。





カブトガニ博物館 — 幻虹台

晴れた日には
笠岡諸島の島々が見渡せる



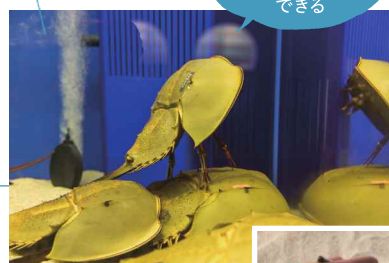
2億年前から変わらぬ姿で生き続け「生きている化石」と呼ばれるカブトガニ。
その繁殖地である神島水道の東側には幻虹台のある御嶽山があり、瀬戸内海に浮かぶ
大小31の島々からなる笠岡諸島の多島美をはるか遠くまで一望できる絶景スポットとなっています。

笠岡市立カブトガニ博物館



カブトガニをテーマにした世界で唯一の博物館。建物はカブトガニをイメージした形状で、カブトガニのほか、同じ時代を生きてきた恐竜たちを展示しています。

カブトガニ



生きたカブトガニをじっくり観察できる



筆を使って砂の中にかくれた化石などを掘ったり、カブトガニシアターでは、クイズ形式でカブトガニについて楽しく学べます。

展示コーナー



標本や化石、動くマリオネットなどの展示でカブトガニを詳しく知ることができます。恐竜標本の展示では、動くパリオニクスの模型もあり迫力満点です。



マリオネット

手元のレバーで自由に動かせる！



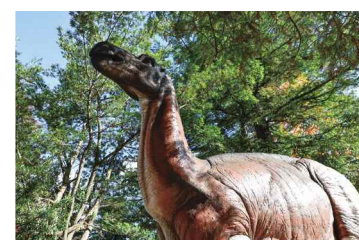
幻虹台



眼下に笠岡諸島のパノラマが広がる標高310メートルの御嶽山。その山頂手前にある展望台で、瀬戸内海と笠岡諸島の島々を一望できます。その眺望の素晴らしさから、瀬戸内海国立公園に指定されています。

恐竜公園

カブトガニ博物館に隣接する公園。園内各所には本格的な実物大の恐竜が展示されています。「森林」「砂漠」「海」の3つのゾーンに分けられ、当時の植物なども再現されています。まるで恐竜時代にタイムスリップしたような臨場感を味わえるので、親子連れや地元の方にも人気のスポットです。



近くで見ると
大迫力！



身長よりはるかに高い実物大の恐竜たちはとてもリアルで今にも動き出しそう。



いとう ゆうき

伊藤 祐輝さん

笠岡市産業部商工観光課

たけうち なおや

竹内 直弥さん

浅口市産業建設部産業振興課

そんな国立公園の魅力を連携して発信したい
非日常の空間、奇跡的な自然環境

—— 施設の管理や情報発信、イベントなど、観光行政の最前線で瀬戸内海国立公園を支えている2人。美しい景色や豊かな自然を守り続ける取り組み、魅力を引き出す新たなアイデアについて語り合ってもらい、地域の可能性を探りました。

ゆったり流れる「島時間」に心が浄化される

—— 瀬戸内海国立公園がある地元には、どのような思い出や印象に残る景色がありますか？

伊藤 私が生まれ育ったのは笠岡市神島で、実家には干拓前の海の写真がありました。あの広い土地が昔は海だったなんて、子ども心にすごいな—と思って見ていました。笠岡市の採用面接で「たくさんの人とかわかる仕事をしたい」と伝えところ、商工観光課に配属されました。実家のすぐ近くにある道の駅笠岡ベイファームを担当することとなり、不思議な縁を感じています。

竹内 私も笠岡市生まれですが、子どもの頃に隣の里庄町に引っ越しました。毎年夏になると、家族や友達と青佐鼻海岸へ泳ぎに行った思い出があります。野球をやっていたので、寄島運動場へはよく試合に行きました。当時寄島町ではマラソン大会も開かれていて、寄島といえばスポーツを

するところというイメージが強かったですね。中学、高校は伊藤さんと同じ浅口市の学校に通っていて、第二の故郷でもある浅口市を活気づけたいという思いで入庁しました。

伊藤 笠岡市には、笠岡諸島と本土側それぞれに国立公園のエリアがあります。島の魅力は、やっぱりあの非日常的な雰囲気ですね。島で過ごす、ゆったりとした「島時間」が流れていて、いつも心が浄化されます。海水浴場の水質調査で白石島などに行くことがあるのですが、休憩時間に波の音を聞きながらお昼を食べていると「もう戻りたくないな」と思う程です。本土側では、大島地区にある御嶽山が特におすすめです。山頂手前の幻虹台（げんこうだい）という展望台からは笠岡諸島を一望できて、広大な

干拓地も見渡せるんですよ。公衆トイレなど観光地の公共施設の管理をしていたとき、上司に案内されて初めて行ったのですが、もう冗談抜きで感動しました。

竹内 私も海の景色が大好きです。バイクに乗るのが趣味で、「ちょっと走りたいな」と思ったらとりあえず海を目指します。笠岡から寄島を抜け、倉敷市の黒崎から玉島へ抜ける県道なんか最高ですよ。海岸沿いで直線とワインディングロードが折り交ざり、ずっと海を見ながら走れるルートなんです。心地よい潮風や磯の香りなど、海の魅力を体感できます。ランニングやサイクリング、写真撮影など、思い思いに楽しんでいる人を見ると、「やっぱり海って特別な場所なんだ」と思います。

キラリと光るスポットを多くの人に知ってほしい

—— 地元の魅力をPRするために、心掛けていることはありますか？

竹内 産業振興課に配属されてからは、なるべく現場に出て一つ一つの観光地を詳しく知り、体感したことを伝えるようにしています。中学高校と浅口市に通って、今も浅口市で働いているのに、意外と知らないことって多いんです。名前や場所だけ知っていて、行ったようで行ってなくて。近くにあると「いつでも行ける」と思って、あんまり深く見てなかったんです。倉敷、福山という大きなまちに挟まれたこのエリアですが、キラリと光るスポットがあるんです。そのことを多くの人に知ってほしいですね。

伊藤 まずは友達や家族など、身近な人へのPRから始めるようにしています。笠岡と浅口は、2022年公開の映画「とんび」のロケが行われたのですが、海に近い旧大島東小学校の校舎では卒業式のシーンが撮影されました。この旧小学校の横におばの家があって、俳優さんの控え室に使われてたんです。このような観光パンフレットに書かれていない“小ネタ”も盛り込んで、相手の興味を引くようにしています。



御嶽山の幻虹台からの景色。笠岡諸島を一望できる大パノラマは圧巻です。

profile / 伊藤 祐輝

2000年岡山県笠岡市生まれ。大学を卒業後、2022年に笠岡市役所に入庁し、税務課、金光総合支所産業建設課、秘書政策課、総務課を経て2024年より産業振興課に配属。青佐山御台場（展望台）や藤波池キャンプ場など観光施設の管理のほか、よりしま海と魚の祭典や金光植木まつりなどのイベント開催などを担当している。

竹内 直弥

1991年岡山県笠岡市生まれ。大学を卒業後、2015年に浅口市役所に入庁し、税務課、金光総合支所産業建設課、秘書政策課、総務課を経て2024年より産業振興課に配属。青佐山御台場（展望台）や藤波池キャンプ場など観光施設の管理のほか、よりしま海と魚の祭典や金光植木まつりなどのイベント開催などを担当している。

奇跡的な環境で育つアッケシソウを守る会が保護

—— 国立公園に指定された景勝地を含め、それぞれの地域を盛り上げるために行政や住民はどのような取り組みをしていますか？

竹内 国立公園がある寄島地区最大のイベントが、毎年冬に開催する「よりしま海と魚の祭典～ふるさと産業まつり～」。特に人気なのが寄島カキの販売で、オープンしてあっという間に完売します。夏に開かれる「あさくち花火大会」も人気。広大な寄島干拓が観覧場所で、音楽に合わせて打ち上がる花火を寝転がって楽しむことができます。

伊藤 笠岡市も毎年夏に花火大会があり、笠岡湾干拓の堤防から打ち上げます。2024年はたまたま浅口市と日程が重なり、お互いちょうどよい感じに客足が分散しました。他にもJR笠岡駅前のメインストリートで地域の方たちが連を組んで踊る「笠岡よっちゃんれの夜」というイベントを開催しています。

竹内 一番の売りはアッケシソウ。寄島干拓地の南側には本州唯一の自生地があり、塩分のある湿地という珍しい環



毎年10月中旬頃には「アッケシソウ祭り」が開催されます。



弘法山開龍寺の大師堂は弘法大師が修行した場所と伝わっています。

境で奇跡的に生育しているんです。ここでは、地域住民が「アッケシソウを守る会」をつくって保護活動をしています。小中高生のボランティアが毎年草刈りや清掃を行うなど、次世代を担う子どもたちも支えています。アッケシソウが初めて見つかった北海道厚岸町との交流も始まり、生育方法を意見交換したり、小学生たちがオンラインで学習成果を発表しています。

伊藤 国指定名勝の高島や白石島など、島には見どころがたくさんあります。白石島の開龍寺は、巨大な岩の下に大師堂が建っていて、押しつぶされないのが不思議なんです。そんな笠岡諸島は、国立公園でない北木島も含め、2019年に香川県の1市2町の島々とともに「せとうち石の島」として日本遺産に認定されました。笠岡市も地元団体への草刈り等、景観保全の委託に予算を付けたりして環境保全をバックアップしています。6年目となる2025年がちょうど日本遺産について審査される年で、今までの取り組みがどう評価されるのか。行政としては正念場を迎えています。



広域的な取り組みで観光客を呼び寄せたい

—— 瀬戸内海国立公園をより魅力的にするため、今後どのような取り組みを進めるべきだと考えますか？

伊藤 日本遺産の活動にしても笠岡市だけで頑張るのではなく、丸亀市や小豆島の土庄町、小豆島町など構成自治体と連携して保全やPRをしないとうまくいきません。瀬戸内海国立公園の魅力発信でも同じで、他の市や町と協力していくことが重要なのかなと思います。笠岡市や浅口市、それに竹内さんが住む里庄町などを含め岡山県西部の3市2町には「井笠広域観光協会」という組織があり、ドライブマップやグルメマップの作成などいろんな事業をしています。福山市など備後圏域も含め「みんなで頑張ろうよ」という空気を作って観光客が誘致できればと思います。

竹内 寄島園地の南には、「三ツ山」と呼ばれる浅口市唯一の島があります。名前の通りちょうどおにぎりを三つ並べたような形の島です。今は木も生えていない島なのですが、昭和の写真を見ると山頂に立派なマツが生えていて、現在その景観を復活させる取り組みが始まっています。寄島町出身の方が昔の景観を取り戻してほしいと市に寄付したのがきっかけです。合併した金光町がちょうど植木のまちということで、その金光の植木職人さんたちと一緒に潮風に強いクロマツをどうやったら生えるのか研究しています。既に苗を植えていて、生えてくるのが待ち遠しいですね。

伊藤 笠岡市は人口が減少してるんですが、「とんび」をはじ



近くの青佐山(おおさやま)御台場からも綺麗に見ることができる三ツ山。



寄島園地からは三ツ山やカキいかだなど瀬戸内の風景を見ることができます。



白石島海水浴場のビーチの周りには旅館、民宿が軒を連ねています。ワーケーションとして訪れる方もいるそう。のんびりとした「島時間」を体感できます。

め、2022年公開の「ラジエーションハウス」など、多くの映画のロケ地に選ばれていて、注目されていると思うんです。これをきっかけに、観光資源を活用して何かしら笠岡に魅力を感じてもらえたらうれしいですね。本土にいてどうしてもスマホなんかを触っちゃうんですけど、島で何もしない時間というのはほんと心地いいんです。島には実は宿泊施設がたくさんあって、軒数ベースなら本土よりも数は多いんですよ。私も大好きな「島時間」をゆっくり過ごしてもらって、非日常を体験してもらいたいと思います。

竹内 人口減少は浅口市も同じで、特に寄島町では空き家が増えています。市では空き家バンクをつくって、持ち主と住みたい人との橋渡しするお手伝いをしているところです。海が見えるというロケーションを気に入って、別荘地のような感じで引っ越してくるシニアの方もいますよ。にぎわいをつくるためには、やっぱり魅力を知っていただくことが一番かなと思います。アッケシソウも素晴らしいですが、すぐ近くの寄島園地も、春には桜が一面に咲き、瀬戸内海国立公園を一望しながらお花見ができるのでおすすめです。そんな情報をしっかり発信していきたいですね。もちろん、地元の方の協力が欠かせませんので、地域住民をしっかり巻き込んでイベントを開催し、多くの人に来てもらうような仕掛けを作っていきたいと考えています。





美しい景観と豊かななりわいをいつまでも
海の環境を守り、水産資源を残す漁師たち

みやけ ひでじろう
三宅 秀次郎さん
寄島町漁業協同組合 代表理事組合長

—— 漁協のSDGs活動として「海ごみの回収」「カキ殻のリサイクル」「アマモ場の再生」に取り組む三宅秀次郎さん。
養殖カキに代表される海の幸や、豊かな漁場でもある寄島の海の魅力について聞きました。

養殖カキ、サワラ、ガザミ… 四季折々の海の幸

生まれも育ちも寄島で、この海と山で遊んで育ちました。テレビゲームが出だしたのは小学校後半の頃ですから、外に出て家の近くで遊ぶしかなかったんです。当時はまだ漁港の近くに干潟が点々と残っていました。護岸工事により漁師たちの作業は便利になりましたが、遊ぶ場所はなくなってしまいましたね。

祖父もおじさんも漁師で、いとこ2人もおじさんの後を継いで漁業をしています。うちの親父はサラリーマンでした。なぜか漁師をせずに、造り酒屋で働いていたんです。それでも身近な人が海の仕事をしていた、おじさんにも漁協に來いと言われたこともあって、寄島町漁協に就職しました。寄島の代表的な海産物といえば、やっぱり養殖カキでしょ

profile 1976年岡山県浅口市寄島町生まれ。高校卒業後に寄島町漁業協同組合に入職し、事務職員を経て2010年より第8代組合長に就任。
岡山県漁協組合連合会理事、岡山海区漁業調整委員会委員、地元の学校運営協議会委員など、海や地域に関するさまざまな要職も務めている。

うね。始まったのは1963年で、当時の漁協の理事が産地を視察し、「みんなでやらんか」と呼び掛けて始まったんだそうです。春から10月ごろまでのカキが小さいうちは、養殖用のいかだを陸に近い場所に密集させて成長を抑制し、台風からも守ります。そして10月初めにいかだを栄養が豊富な沖合に移すと、カキたちはバクバクと餌を食べ始めて一気に成長します。こうすることで、濃厚で栄養満点のカキができあがります。県内のほかの産地はむき身が多く量販店や飲食店のお客さんも付いているのですが、うちは殻付きが主で、一般客向けです。漁港にある生産者たちの加工場で水揚げされたばかりのカキを買うことができ、シーズンの

休日ともなると買い物客でごった返して車が通れないほどです。口コミで来てくれるので、出荷経費や宣伝費用もいりません。地方発送もしていて、カキをもらった人が気に入ってくると、リピートで注文したり、また他の人に送ったりして新しいお客さんが増えていく…という理想的なサイクルができています。カキ養殖以外にも、季節ごとにさまざまな魚が楽しめます。春はサワラの流し網漁が行われ、夏はハモやマダイ、秋にはガザミが捕れますね。これら旬の魚を買うことができるのが、漁協が営業する直売所「浜のかあちゃん寄り道」です。金曜と土曜の営業日には朝早くからお客さんの列ができるほどの人気なんですよ。



漁港近くにある人気の直売所にはオープンを待ちわびるお客さんの姿が。店内には新鮮な魚介類がたくさん。中には生きているものも。

高梁川に支えられている水島灘の豊かさ

さまざまな魚が捕れて、カキ養殖でもある程度安定して水揚げができてるのは、豊かな水島灘のおかげです。プランクトンの量や、光合成に欠かせないクロロフィル（植物や藻類に含まれる色素）の数値を見ても、県内海域では寄島が断トツ。カキ養殖もよそだと2年、3年かけて育てる地域もあるのですが、栄養豊富な寄島の海では1年ものだけを扱っています。

それともこれも、水島灘に注ぐ高梁川が恵みをもたらしてくれるから。だからこそ、寄島の漁師たちは毎年、高梁川水系の上流部にある大佐山などで木を植える活動をしています。瀬戸内海国立公園と言うと海ばかりに目が行きがちですが、山とも密接につながっているんです。大学の先生が言うには、山の落ち葉が腐葉土になり、栄養として海に流れてく

るまで30年近くかかるそうです。そう考えると植林活動は、30年後の未来の漁師たちのためにもなる取り組みなんです。ただ、ここ数年で海の様子もだいぶ変わってきました。異常気象のせいか、秋がないと感じます。10月になっても日本近海の水温が高いままで、台風が当たり前のように来るので、カキいかだの沖出し作業は年々遅れています。2024年も半月から1カ月ほど遅れたので、身が大きくなるか気がかりです。

水揚げされる魚も様変わりしています。アナゴやメバルの漁獲量が減り、マコガレイやアイナメなんかは見ることもなくなりました。当たり前のように食べていたシャコも捕れなくなり、形も小型化しています。絶滅しないよう、防衛本能で卵を長期間持つようになっていて、そのために個体が小さ



11月頃からクレーンを使って収穫します。



寄島で獲れたカキ。

くなっているそうです。

一方、マダイやハモは増えています。海の異変は他の地域でも同じで、この間東京の会議で会った山形県の組合長は、日本海のタイの延縄にサワラが掛かるようになったと言っていました。魚は何百万もの卵を産みますが、ふ化や成長に適した温度はそれぞれで違ってきます。マダイやハモにはちょうどよい環境でも、冷水系の魚には厳しくなっているんです。

そんな中でも、水産資源を守る取り組みは昔から行っ

ごみの回収やカキ殻リサイクルで海を守る

寄島町漁協では、もうだいぶ前から瀬戸内海国立公園の海ごみ回収に力を入れてきました。きっかけは、コンビナートのある倉敷市水島地区で活動する水島地域環境再生財団から「海的环境調査をしたいので、船を出してほしい」と頼まれたことでした。底引き網で海底をさらい、どんなごみがあるかを調べたんですが、中には30年前のビールの空き缶も出てきました。分解されずに長い間海底にあったんですね。それ以来、漁師のうちの何人かが、底引き網でかかったごみを持ち帰るようになりました。漁協として特に回収を義務付けているわけではないんですが、活動の輪が自然と広がって、今では魚より先にごみを拾う人もいます。

特にごみが揚がるのは、漁具が変わる11月からです。底引き網に爪を付けるのが解禁になって、魚たちには申し訳ないんですが、海底で潜っているやつを掘り起こして捕るようになります。その爪に、ナイロン系のごみがいっぱい引っかかるんです。海のごみの7割が河川から流入すると言われていて、その年の雨の降り具合などによってもごみの量が変わることも分かってきました。

ほかにも、カキ殻のリサイクルにも取り組んでいます。選別で出てくる身の入っていない殻や、むき身にしたときに出る殻を集めるほか、カキいかだの下に落ちた「落ちカキ」を底引き網で回収します。集めた殻を粉碎して半年以上水にさらし、その後専門業者がニワトリのえさや農作物の肥料に再生させるんです。岡山県のJAさんも「瀬戸内かきからアグ

ました。国の資源回復計画に基づいて、瀬戸内海の11府県のサワラ漁師たちは、流し網の目を大きくし、秋サワラの全面休漁などを実施しました。その成果があって、魚が戻ってきたという感触がありますね。ガザミについても、岡山県と協力して中間育成を進め、卵を抱えていたり小さかったりするものは放流をしています。

水島灘の恵みによって、漁業者は育ててもらっています。だから、食においても環境保護においても、私たちが先頭を切ってやっていかなければいけないと思っています。



寄島園地から見えるカキいかだ。

リ事業」というプロジェクトを進めていて、カキ殻を使った肥料で育てたお米を「里海米（さとうみまい）」と名付けてブランド化しています。品薄になるほどの人気で、瀬戸内海国立公園指定90周年の記念式典でも配られました。

魚たちが卵を産み、生育するアマモ場の再生にも挑戦しています。古い漁師さんが言うには、昔は漁船のプロペラに巻き付くほどたくさん生えていたそうです。備前市日生町などの先進地から種をもらい受け、青佐鼻海岸の沖にまいていきます。口で言うと簡単ですが、アマモは水深が深すぎると光合成できないし、浅すぎると海が濁ってしまいます。生育にちょうどいい海域を探すのがなかなか難しかったですね。40年近く取り組んでいる日生町では数ヘクタールにもわたって生えるようになりましたが、うちはまだチョロチョロっと生えた程度。いつかはアマモ場が広がり、「海のゆりかご」として多くの命を支える場所になってくれたらと願っています。

SDGs（持続可能な開発目標）の目標14には「海の豊かさを守ろう」とあります。さまざまな取り組みを進めているうちに、SDGsに関する勉強会などで講師を頼まれることも多くなりました。発表や講演とかには慣れていないので、僕はいつもアドリブ。話を聞いてくれる企業の方から「どうすればSDGsを進められますか」と質問されることもあるんですけど、「自然体でできることをコツコツと続けて、結果的にSDGsに結び付いた」というのが理想だと思っています。



変わらない景色と海のなりわいを守るために

時代とともに海の様子は変わっていますが、変わらない景色もあります。おすすめの場所は寄島園地。特に南側にある三郎海岸には子どものときからよく行ってきました。今は車道が通っていますが、子どもの頃はまだなくて、海岸の岩場を伝って行くか、寄島園地の山を越えるしかありませんでした。少し苦労してたどり着いた先の絶景は何とも言えませんでしたね。寄島干拓地を挟んで漁港の反対側にある青佐鼻海岸も、昔と変わらないままです。海の景色は1年を通じて大きく変わらないんですが、空は季節ごとに表情が違います。夏は積乱雲が多くて、秋はうろこ雲が出ます。この点々としたうろこ雲がはっきり現れだしたら、風が強くなる前ぶれと言われていて、漁師たちは海に出るのを控えたりしていました。昔は雨雲レーダーなんてなかったですから、このような言い伝えを頼りに出漁するかどうかを決めていました。

地域の人口が減っている中で、漁業の後継者不足は大きな課題です。昔は男の子はみんな漁師になっていましたが、今はそういうわけにはいかない。いどこにも息子が3人いますが、全員漁師にするつもりはないと言っています。一方で、比較的收入が安定している養殖では、20代の若者が頑張っていたりします。漁港や地域を持続させるには、やはり漁業者が経済的に安定することが重要なのではないのでしょうか。そうすれば、瀬戸内海国立公園の美しい景色も守られるんじゃないかと思っています。



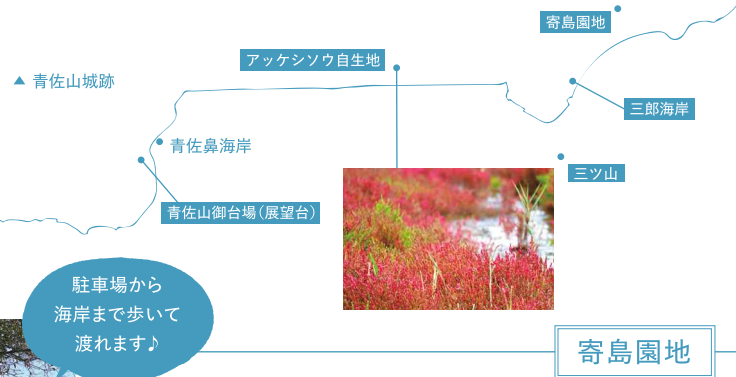
三郎海岸。海岸からは三ツ山も見ることができます。山沿いの人が付きにくい場所にあるため、ゆっくりと過ごせます。



左から漁港内にあるカキの加工場。ここでもカキを販売しています。カキの加工の様子。働く若い人の姿も。

寄島園地 青佐山

「天文のまち」としても知られる浅口市。
かつて島だった寄島園地は干拓で地続きとなっており、
全体が瀬戸内海国立公園に指定されています。
寄島園地や青佐山の上からはシンボルである
三ツ山や瀬戸内海の多島美を見ることができます。
自然海岸にも隣接した自然豊かな癒やしの場所です。



三郎海岸

寄島園地の南に隣接する
自然海岸。東西約1キロ
メートルにわたって砂浜が
広がっており、昔ながらの
自然が残っています。釣り
や海水浴が楽しめます。

寄島園地

海岸から寄島園地に
登ることができます



瀬戸内海ならではの
壮大な景色



三ツ山

寄島の西海岸沖に
ある花崗岩からなる
三つの島。干潮時には
本土から歩いて
渡ることができます。



おさやまおだいば 青佐山御台場(展望台)

かつて鴨方藩が海防のために築いた
砲台跡地。ここからは三ツ山を正面から
見ることができ、近くで見るとはまた
違った印象です。他にも備讃瀬戸の
島々も眺めることができます。ベンチも
あるので、のんびり過ごせます。



海のマーブル模様と
可愛い三ツ山

瀬戸内Story

発行日 / 2025年3月 発行
発行者 / 環境省 中国四国地方環境事務所
〒700-0907 岡山県岡山市北区下石井1-4-1
岡山第2合同庁舎ビル11F
TEL 086-223-1586 / FAX 086-224-2081
WEB <https://chushikoku.env.go.jp/>

企画・制作 / 両備ホールディングス株式会社
アートディレクション・デザイン / 加藤訓子
デザイン / 秋岡葉子
ライティング・校正 / 藤田勝久
撮影 / 高橋孝介

編集後記

三冊目となる今回は岡山県の西側に位置する笠岡市と浅口市を訪れ、島に古くから伝わる踊りと踊り手、絶滅の危機にある生物や植物、海の環境と産業、地域の暮らしなど様々なものを守り未来へ繋ぐ方々に取材をさせていただきました。生まれ育った場所や生活に溶け込んだ国立公園の雄大な自然への想い一しずつ積み重ねられた日々の活動の大切さを話される声は力強く心に響きました。私たちが未来へ繋げる役割を担っているのだと改めて感じました。今回の表紙は奇岩が点在する白石島からの景色。ぜひ登って体感してほしい。きっと忘れられない場所になるのではないのでしょうか。この“瀬戸内Story”を通して少しでも多くの人に地域の活動を知っていただき、各分野で地域に関わる皆さんの思いが届くことを願っています。最後に、制作にご協力いただいたすべての皆さまに心から感謝申し上げます。

※本誌掲載のデータは2025年3月現在のものです。 ※内容の無断転載はご遠慮ください。



瀬戸内海国立公園サイト
<https://www.env.go.jp/nature/nationalparks/list/setonaikai/>